

## 障がい者スポーツの推進

北翔大学 千葉ゼミ

○山根 裕稀 角田 祐樹 真鍋 亮 松田 卓大 吉川 航平

### 1.はじめに

今年の7月に神奈川県相模原市の障がい者福祉施設で、殺傷事件が発生し、19名の方が亡くなった。この事件の容疑者は障がいを持った人に対する差別的な思想を持っていたと報道されている。このような考えは一部の偏狭な人の思想であるが、障がい者に対する健常者の理解を深める必要があることが再確認された。なぜ健常者は障がい者に対する偏見を抱いてしまうのだろうか。どうすれば、障がい者への理解を深めることができるだろうか。

われわれは、こうした問いを探求するなかで、障がい者のスポーツに着目することにした。2016年9月にリオデジャネイ・パラリンピック（以下、リオ・パラ）は、159カ国・地域から4400名の選手が参加してブラジルで開催された。

パラリンピックに出場する選手や一般の障がい者のスポーツ選手は、どのような課題を抱えて競技活動を行っているのだろうか。たとえば、男子走り幅跳びのマルクス・レームは、2015年10月の国際パラリンピック委員会世界選手権大会で8メートル40センチという世界記録を出した。片足が義足であるが、彼は今回のリオ・オリンピックへの出場を希望した。しかし、国際陸上連盟の返答は「義足が有利でないことを証明すること」であり、今回のリオ・オリンピックに出場を果たせなかった。

障がい者のアスリートがオリンピックに出場できないという問題は、ある種の障がい者の排除につながらないのだろうか。さらに、障がいのあるスポーツ選手は、日本社会で生活する中でどのような課題を抱えているのだろうか。本研究では、障がい者スポーツの課題を明らかにし、スポーツ現場における健常者との格差をなくすための提言を行う。

### 2.研究方法

本研究では、北翔大学で車椅子ソフトボールチームに所属する選手へのインタビュー調査を行った。さらに、障がい者スポーツに関する書籍や資料を用いた文献研究を行った。インタビュー調査は、2016年9月に同大学の車椅子ソフトボール選手A君を対象に1時間程度行われた。質問内容は、A君の障がいの程度、車椅子ソフトボールを始めた経緯、障がい者スポーツの現状や施設の利用などであった。

### 3. 障がい者スポーツの課題と現状

#### (1) 障がい者の公共スポーツ施設利用に関する課題

インタビュー結果から、障がい者が公共のスポーツ施設を利用しようとしても十分に利

用できていない実態が明らかになった。車椅子の方が体育館を利用しようとしても、床が汚れてしまうという理由で利用拒否されたり、水泳ではレーンを障がい者が少数で使うのは効率が良くないとの理由で利用を断られたりすることも多くあるそうです。その他にもバリアフリーの進んでいないスポーツ施設が多いという指摘があった。

## (2) オリンピックとパラリンピックの格差

障がい者スポーツの国際大会やパラリンピックは、オリンピックと比べると大会規模、運営経費、テレビ放送の頻度・視聴率など大きな格差があり、パラリンピックは健常者にはあまり視聴されない傾向にあります。開会式の視聴率を調べると、リオ・オリンピックは 23.6%、リオパラは 7.8%と差がありました。リオパラリンピックでも観戦チケットが 240 万枚中 30 万枚しか購入されなかったことも問題になりました。世界的にも障がい者スポーツへの興味関心が低いことがわかります。

日本オリンピック委員会から支払われるメダル報酬もオリンピックは金 500 万円、銀 200 万円、銅 100 万円であり、パラリンピックは金 150 万円、銀 100 万円、銅 70 万円と金メダルだけで見れば 3.3 倍もの格差がある。なぜ同じ様に名誉のある競技成績にもかかわらず格差があるのだろうか。

## (3) インクルーシブ体育の必要性

インクルーシブ体育とは、「障がいのある子と障害のない子が同じ集団の中で行う体育」(草野,2007:8) のことである。障がい者と健常者は別々に体育の授業を受けるのが一般的でした。しかしそこから生まれる多くの問題に気づき、その反省に基づきインクルーシブ体育が始まりました。健常者は普段、障がい者と触れ合う機会が限られており、学校教育から競技場面にいたるまで、別々に行動することが多いため障がい者への偏見を助長してしまうのではないだろうか

インクルーシブ体育を進めていく中で第一の壁といわれているのが能力差である。障がいのある子とない子の運動能力を平均値で比較してみると、障がいのある子どもの運動能力は低い状態にある。しかし、障がいのある子の中にも運動能力が高い子もいる。健常児の中にも運動能力が低い子もいる。障がいの有無にかかわらず能力差は生じるものである。

指導者もまた、教えにくさから「能力差」を問題視している。障がいのある子に対しての指導経験不足、知識不足、また学校内の施設・設備の不十分さ、などが問題としてあげられている。

インクルーシブ教育の中で障がいのある生徒が地元の学校に通えているのはいいが、体育の授業や部活動にしっかりと参加できている例は少なく、中学校と高校の体育教員に障がい者と健常者を出来るだけ区別しない指導、インクルーシブ体育を実践できている教員が少ない。

インタビューの対象者の A 君は、学校行事の遠足では車椅子での 5 キロの移動は難しい

と教員が車で目的地まで送ると提案を受けたが、周りの人の支えもあり 5 キロを一番で走破しました。それからは周りの見方も変わり体育の授業も健常者と同じように参加できるようになり、学校全体の理解も深まりました。このように健常者と障がい者を区別しない活動を通し新たな理解を深める必要がある。

#### (4) スポーツ施設職員にみる障がい者スポーツ資格の保有率

公共や民間のスポーツ施設に障がい者スポーツに関する資格を持っている指導者が不足している。図 1 の通り、地域のスポーツ施設での障がい者スポーツ指導員〈上級〉を持っている人は 0 人。中級も極めて少ないことがわかる。

#### (5) 障がい者のスポーツ参加に伴う自己負担金

インタビュー調査の結果から、障がいを持った方がスポーツ活動をするうえで、大きな壁の一つに金銭面の問題がある。国際大会に出場している選手たちは 100 万円から 150 万円の競技用の車いすを使用しているが、競技によっては耐用期間が 1 年と短く、金銭面の多くは自己負担なので競技を行う上で問題になっている。社会復帰やリハビリテーションを目的にスポーツを行う方も施設までの移動費や遠征費、用具費など様々な面で負担が掛かる。

#### (6) 各種スポーツ協会と障がい者スポーツ協会の連携不足

日本のスポーツ協会は、多くの場合、健常者と障がい者で別々に組織を作っており、お互いのスポーツ大会を共同で開催し、交流する機会が少ない。

#### (7) 保健体育教師の障がい者スポーツへの理解不足

日本福祉大学教授の藤田紀昭氏ら（2014）の研究によると、保健体育教員養成を行っている全国の 154 大学 160 学部で、障がい者スポーツ関連授業を開講しているところが 47.9%で、その半数は（公財）日本障がい者スポーツ協会の障がい者スポーツ指導者養成認定校だった。また、選択科目として開講している場合の履修率は 3 割以下のところがほぼ半数であった。

### 4.提言

#### (1) 2020 年東京オリンピック・パラリンピック同時開催

パラリンピックをオリンピックと同時にやり、健常者が障がい者スポーツを実際に観戦したり、テレビなどで視聴したりする機会を増やし、障がい者スポーツの注目度を上げる。また、インクルーシブ社会の実現を促す。

#### (2) 各種スポーツ協会への障がい者スポーツ組織の編入

サッカー協会にブラインドサッカー協会や脳性麻痺 7 人制(CP)サッカー協会など、ソフトボール協会に車いすソフトボール協会などが傘下に入り、大会を同時に開催し、

交流などを行い、健常者が障がい者スポーツに触れる機会を拡大する。

(3) インクルーシブ体育の推進

インクルーシブ教育の中でも特に一緒に活動できる学校体育の授業で健常者の生徒と障がいのある生徒と一緒に参加する機会を増やし、部活動も分けることなく、一緒に活動する機会を増やす。また、学校行事や参加日などでのレクリエーションで保護者も交えての交流の機会を作る。そこで障がいのある人に対する理解を深める。

(4) 障がい者が利用できるスポーツ施設の増設と有資格者の常勤

障がい者スポーツ施設やバリアフリーの整った地域スポーツ施設を増設し、障がい者が気兼ねなくスポーツ施設を利用できる環境を作る。また、そのスポーツ施設に障がい者スポーツ指導員資格の初級所持者を3名以上、中級所持者を2名以上常勤させ、障がい者のスポーツ活動のサポートや直接指導を行えるようにする。

(5) 保健体育教員免許養成カリキュラムに障がい者スポーツ関連授業の必修化

学校の現場でインクルーシブ体育での対応を迫られている教員が多いこと、そのための準備を学生時代にしていない教員が多いこと、授業が開講されていても履修する学生が多いとはいえないなどの点から、障害者スポーツ関連授業を保健体育教員養成カリキュラムに必修として組み込み、健常者の児童にも障がいのある児童にも対応できるようにする。

表 1.2020年東京オリンピック・パラリンピック サッカー同時開催日程

2020年7月	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日
	29日	30日	31日				
2020年8月	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日
	8日	9日					

(黄色日はサッカー、青日はブラインドサッカー、緑日はCPサッカー実施日、赤枠日は決勝) ※競技場…サッカー・7人制→屋外サッカーコート  
5人制サッカー→屋外フットサルコート

参考文献

- 藤田紀昭,金山千広,河西正博(2014)「保健体育教員免許の取得可能な大学における障がい者スポーツ関連科目の実施状況に関する研究」  
 草野勝彦(2007)『「インクルーシブ体育」の創造』市村出版  
 「障がい者のスポーツ参加における関する調査研究」(2014) 文部科学省委託事業  
 毎日新聞「そこが聞きたい 障害者スポーツの課題」2016年7月29日付朝刊,12(11)  
 毎日新聞「パラリンピックからの贈り物」2016年6月14日付朝刊,13(22)